赤い蝶

作・花岡大学
え・まえだあきひろ

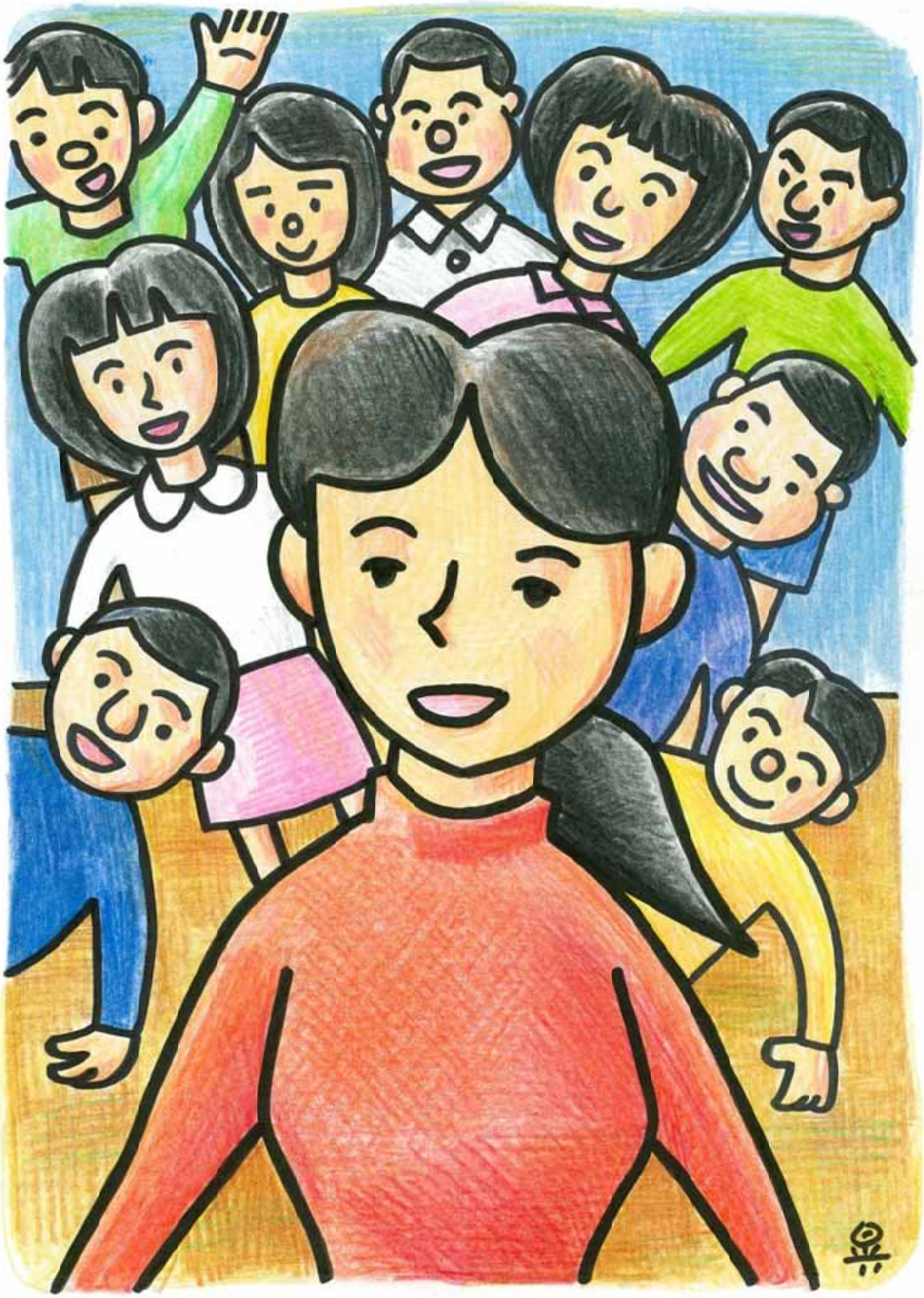
ひまさえあれば、運動場へでてきて、いっぱいあそんでいる、みんなのあいだを、ひらひらととびまわる。

じっさい、気がるに、ひらひらしていなければ、せはちいさくとも、おとなだから、うっかりしていると、ぶっつかるにちがいない。

ひなげしの花のような、うつくしい顔が、すこしあせばんでいる。

そして、なにがおかしいのか、ときどき、かたをすぼめるようにして、くっくっわらった。

この学校へ、かわってきてからこっち、しょっちゅう、眼のさめるような、まっ赤なセーターをぬいだことがない。



とてもあかるく、はきはきしていて、いい先生だった。

みんな、

「ええ先生やな」

と、いった。

「おれ、あんな、あっさりした先生、大すきや」

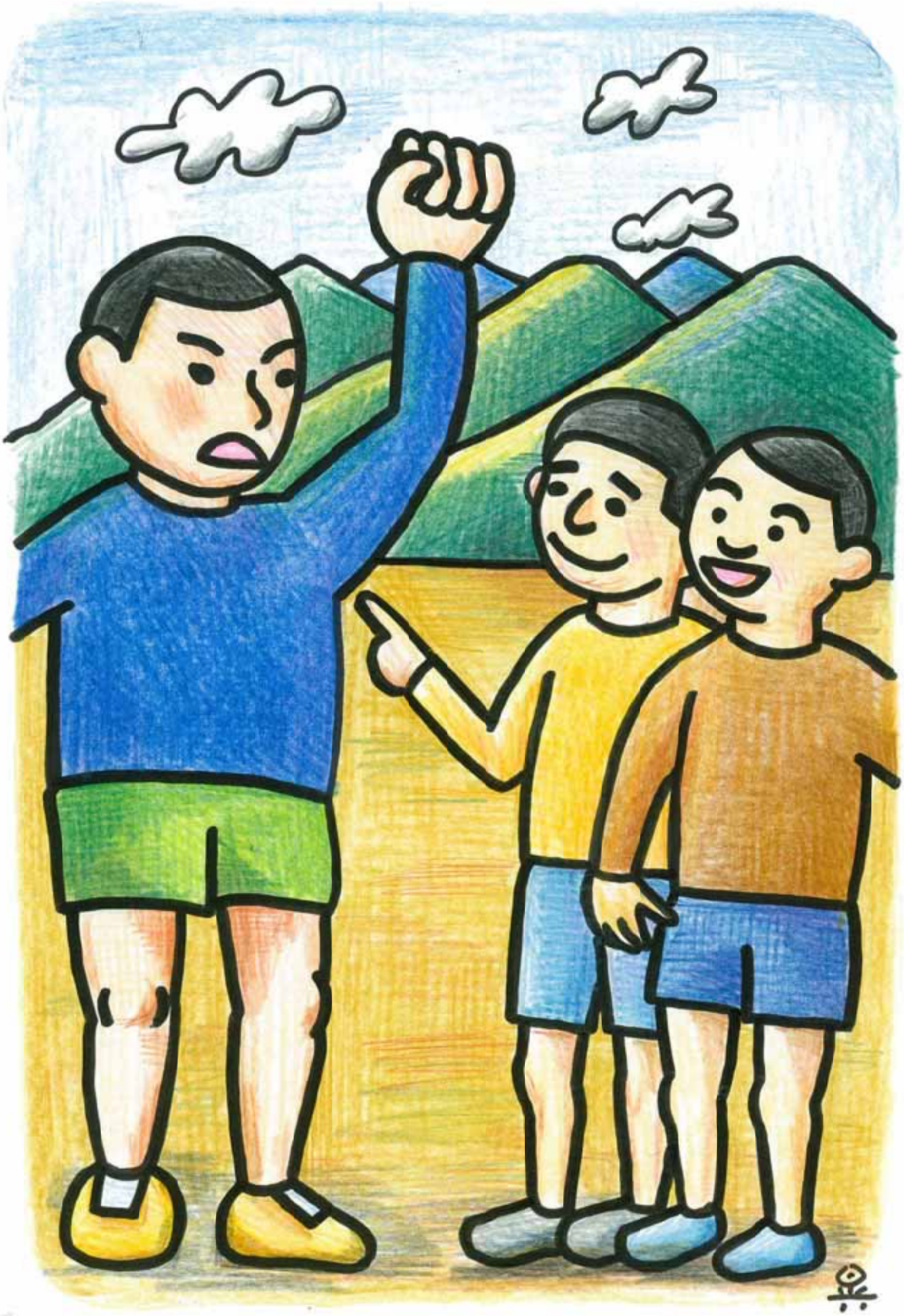
と、男の子は、いった。

、、、
「うちらも」
と、女の子も、いった。

それから、
「なんというアダ名にしようか」
と、こえをひそめて、そうだんした。
アダ名というより、したしみをこめたよび名と、
いった方が、いいかもしれない。
そんなならわしが、この学校に、あったのだ。
良二は、ならったばかりの英語をつかって
「レッド・バタフライ（赤い蝶）にしたら、どや

ろか」
と、いった。
みんなさんせいして、そう、名づけることになった。
そんな、英語でつけたアダ名は、いままでになかったので、みんな気にいって、下のせいとにとくいになって、いいふらした。

それで、たちまち、学校じゅうに、ひろまった。
ところが、一年生のせいとなどは、
「バタバタ先生」
などと、よぶ。
「ちがうよ」
と、そのたびに、良二は、むきになって、とがめたてた。
「レッド・バタフライ先生といえ！」



「ちょっと、ややこしいな。レッド・バタバタ先生にまけとけよ」
と、チンピラたちは、わらいながら、いった。
だが、名づけおやである、良二にとっては、それは、ぜったいにまけられない。
ひらひらととびまわりながら、パチッとみひらいている、あの、みずうみのようにすんだ、大きなくろい眼をみるがいい。

どこに、そんな、バタバタというような、さわがしさがあるか。

眼をつむっても、そのくらがりのなかで、良二は、いきがつまりそうな気もちで、はっきりと大すきな小村先生の眼を、思いえがくことができた。

なぜなら、それは、ながいあいだ、ひとりで、じっとだいじにしていた、なくなった母の眼とそっくりな、しずかなあたたかさを、たたえた、やさしい眼であったからである。

良二は、小村先生が、大すきだということにかけては、だれにもまけないと、ひそかに思っていた。

大すきで、たまらないのだから、小犬のように、じゃれついたって、かまわないだろう。

良二は、よく、じゃれついた。
眼についたら、すぐ、そばへとんでいった。
そして、先生に手をとられて、ちいさなせいとのように、きりきりまいをして、眼をまわしてぶったおれた。
ぶったおれて、ふたりで、わらった。
そんなふうで、小村先生のいるところにはいつでも良二が、にこにこわらいながらくっついているの

で、

「まるで、良二は、先生のこしぎんちゃくみたいなやつや」

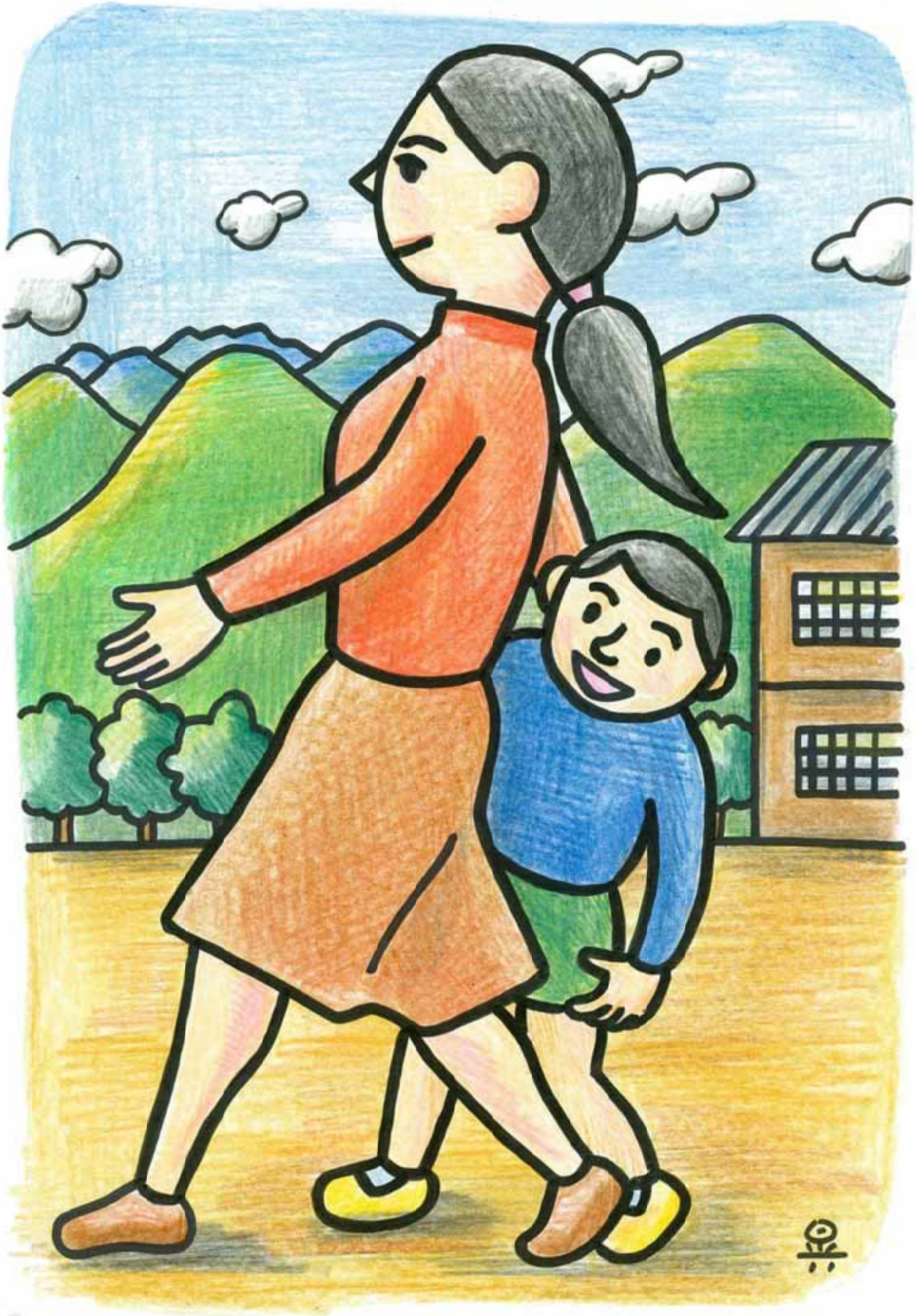
といって、みんなはわらった。

（こしぎんちゃく）というのは、むかしの人が、いつもこしにぶらさげていた、ちいさなふくろのことを、いう。

こしぎんちゃくであろうと、なんであろうと、良

二は、ちっともかまやしない。

きんもくせいのような、あまいにおいのする先生に、だきすくめられながら、下から、じっとそのつぶらな眼を、みあげていると、良二は、いっぺん、あまえて、くすんくすんと、ないてみたいような、気もちにさえ、なるのであった。



小村先生は、となり村の、光明寺のはなれに、げしゅくしていた。

ある日、小村先生は、

「いいものみせてあげるから、きっと、ひとりで、いってらっしゃいね」

と、いった。

良二は、きらっと眼を光らせて、

「はいっ」

と、こたえた。

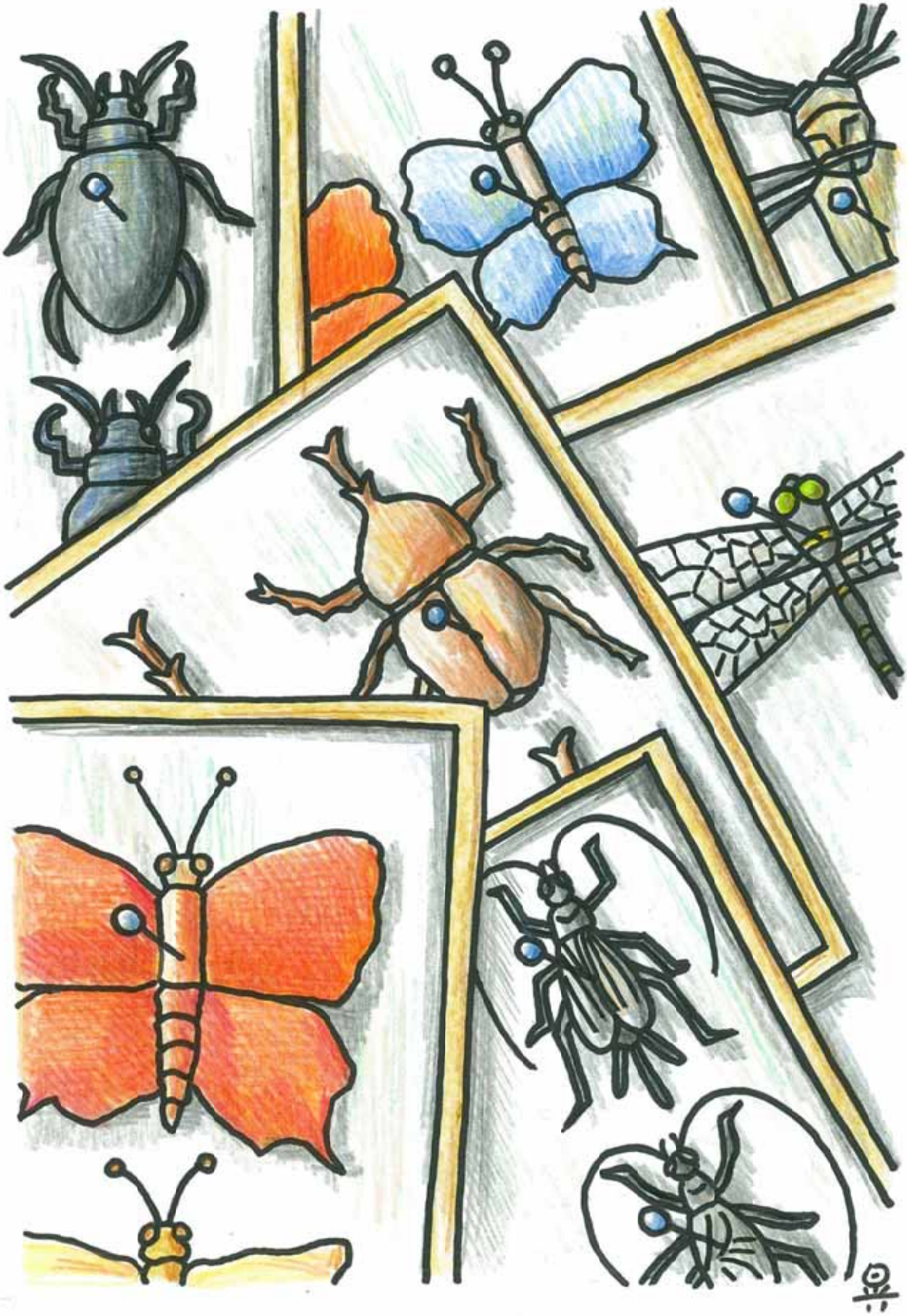
六月のある日曜日だった。
きょう一日、はじめて、先生とふたりっきりで、あそべるのだと思うと、良二のむねは、いきいきとはずんだ。
さわやかにあたたかい、ひるすぎの、あかるいひざしのなかから、
「先生」
といって、いきなり、そのへやのなかへ、とびこ

んでいった。
それで、しばらくは、まっくらで、なにもわからなかった。
だが、すぐ、みえだした。
みえてくると、良二は、あぶなく、
「あっ！」
と、こえをたてるほど、おどろいて、いきをのんだ。

すわっている先生のうしろと、右手の白いかべいっぱいに、おびただしい昆虫が、しんと、しずかに、とまっていたからだった。

かぶと虫、すず虫、げんごろう、とんぼ、かみきり虫、きれいな羽のいろいろな蝶。

しかし、それは、よくみると、みんな、せなかから針をつきさされて、とめられていることがじきにわかった。



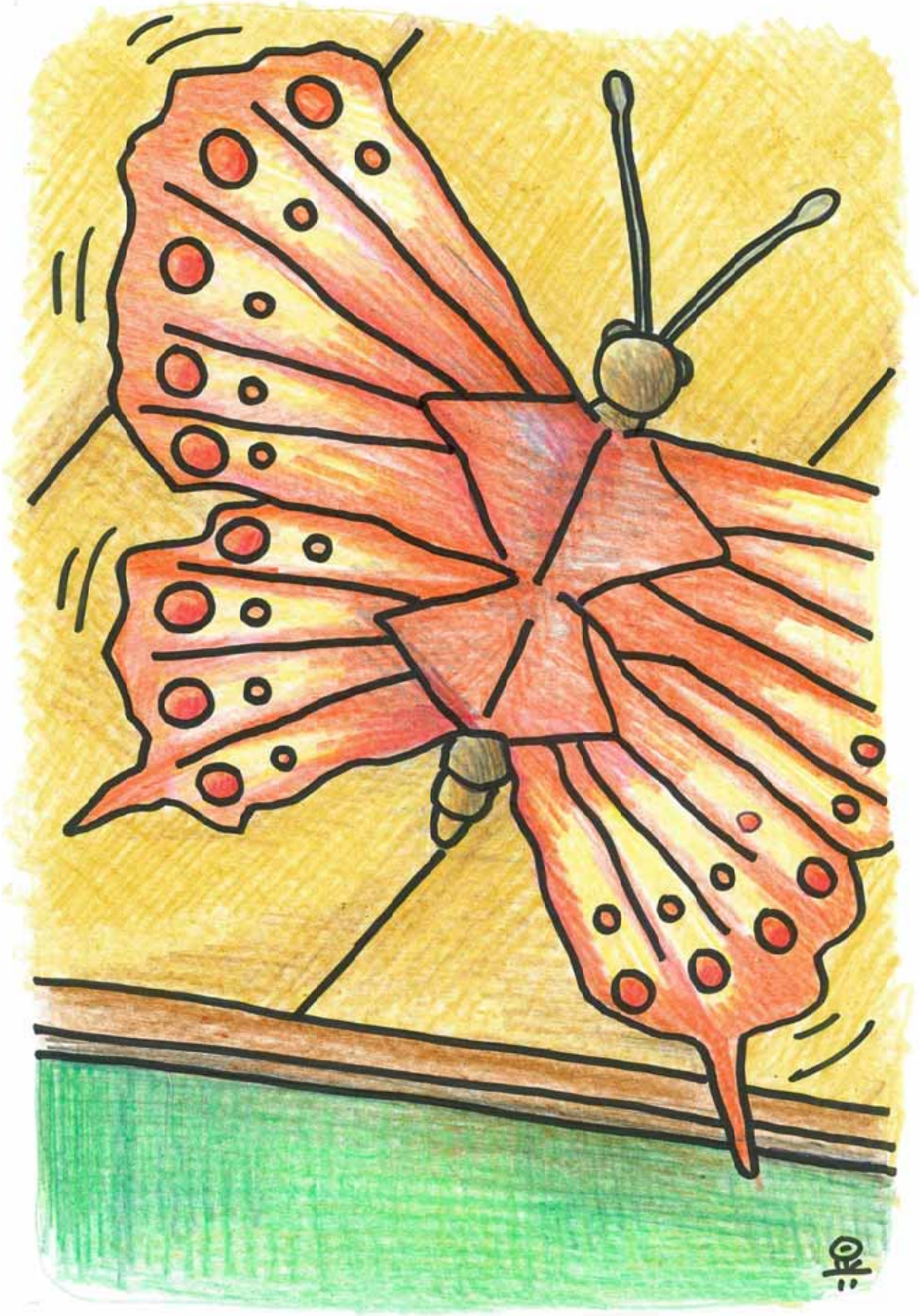
なんという、すばらしい、うつくしさであろう。
だが、このおびただしい昆虫たちは、いっぴきのこらず、死んでいるのだ。
「どう？びっくりした？」
と、いつものようなやさしい顔で、りんごの皮をむきながら、先生は、いった。
「これは、先生が、くしんしてあつめたものよ。きょうは、ぜんぶ、箱からだしておいてあげたのよ」

しかし、良二は、どうしたわけか、なんにも、ものがいえなかった。
いつもの気もちが、すうっとつめたくなって、良二は、すこしいらいらして、からだを、もだえさせるように、ふるわせた。
すると、そのとき、また、たいへんなことがおこってしまったのだ。とつぜん、先生は、
「うわっ！」

と、いうなり、平家がにのように、よこすべりして、本箱のよこにたてかけてあった、捕虫網をとると、

「良ちゃん、はやく、まどをしめて！はやく、はやく」

と、いった。



良二は、はじかれるように、とんでいって、まどを、しめた。

そして、てんじょうのすみで、バタバタしていっぴきの、うつくしい赤いはんてんをもった、ごくらく蝶が、先生の捕虫網で、さっとすくいとられるのを、みた。

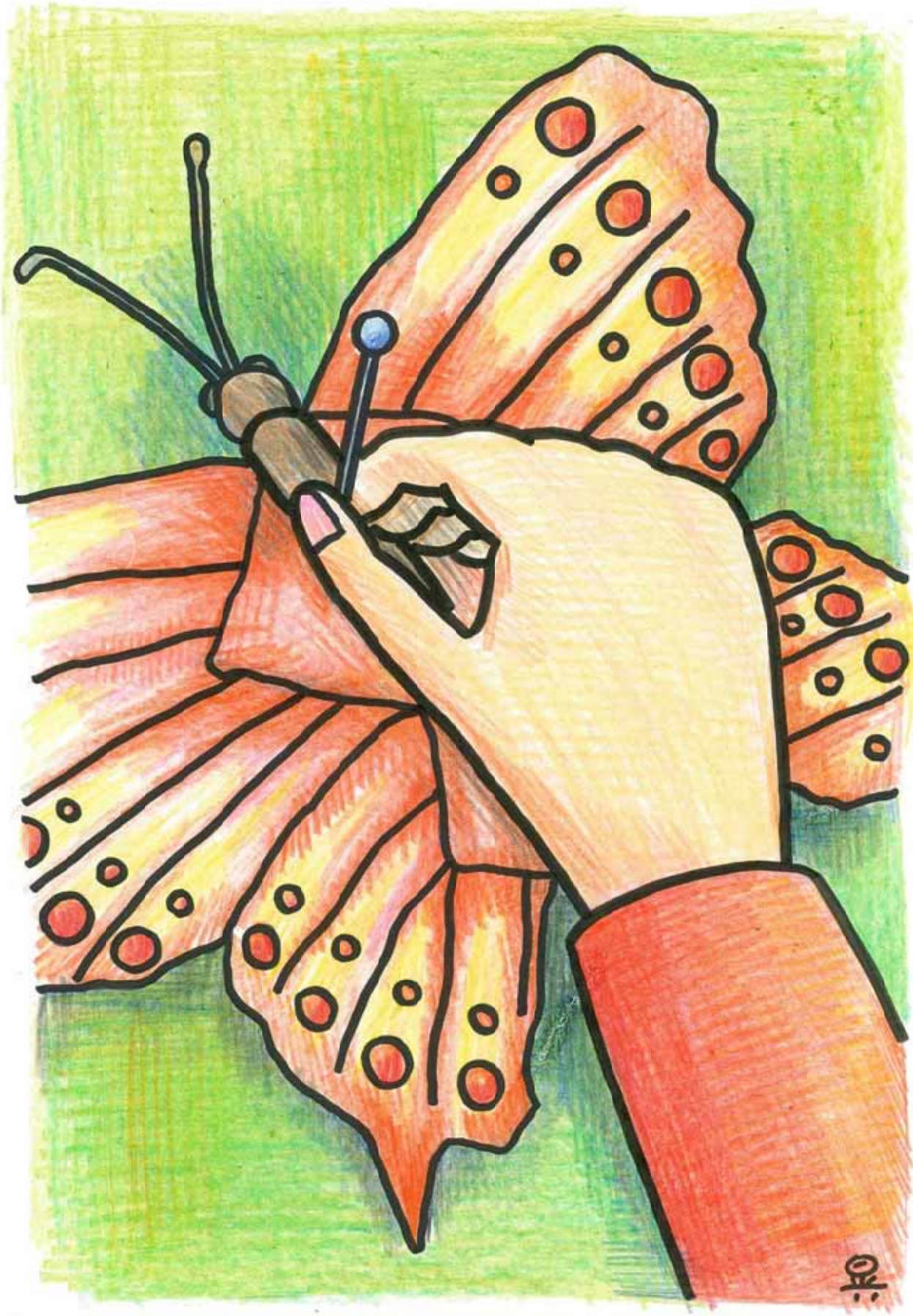
先生は、じょうずに蝶をつかみだすと、そのせなかに、ブスリと、針をつきさし、それを、かべに、とめた。

蝶は、もがきくるしみながら、そのうつくしい羽で、はげしく、かべを、たたいた。

「やっぱり、毒瓶で、ころしておかないと、羽がこわれてしまうわね」

先生は、そんなことを、ひとりごとのようにいい

ながら、毒瓶のふたをとって、瓶の口で、かべの蝶を、ふせ、瓶のなかで、ぴりぴり羽をふるわせている蝶を、その大きな眼で、じっとみすえて、うごかなかった。



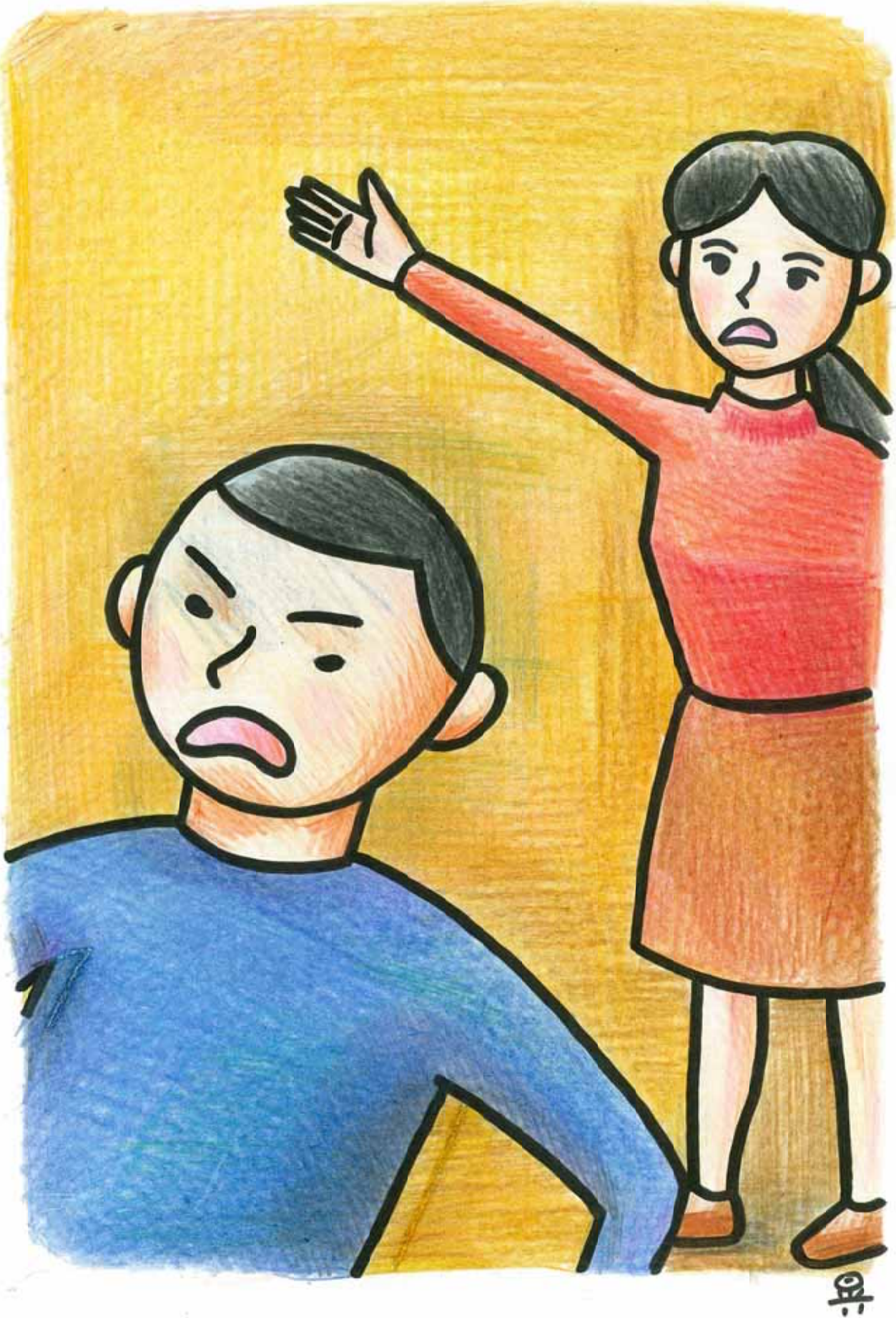
まどのところに、くぎづけになったようにつったって、やけつくような眼で、先生のようすをみつめていた。良二のむねに、そのとき、ふいに、やりどころのない、はげしいにくしみが、むらむらっとおこってきた。

すると、からだが、ぶるぶるふるえてきて、とまらなかった。

良二だって、宿題で、昆虫採集をしたことがある。

だが、それと、まったくちがう。
蝶をとらえて、せなかに針をつきさしたときからの、先生の眼は、氷のようにつめたくさえて瓶のなかでぴりぴりしびれていく羽を、じっとみつめて、うごかなかった。
良二は、そのつめたさが、たえられなかった。
大すきな先生だっただけに、にくしみは、かえって、良二を、まっくらな夜の底へ、つきおとされた

ように、さびしくした。



良二は、もはや、じっとしてはいられなかった。
たちまち、身をひるがえすと、いきなり、そとへ、とび出した。
小村先生は、びっくりして、うしろからなんべんもよびとめた。
だが良二は、まるでそのこえから、ひとときもはやく、のがれようとするかのように、いちもくさんに走った。

土堤（どて）を、走った。

川ぶちの草原まででると、やっと、そこでたちどまった。

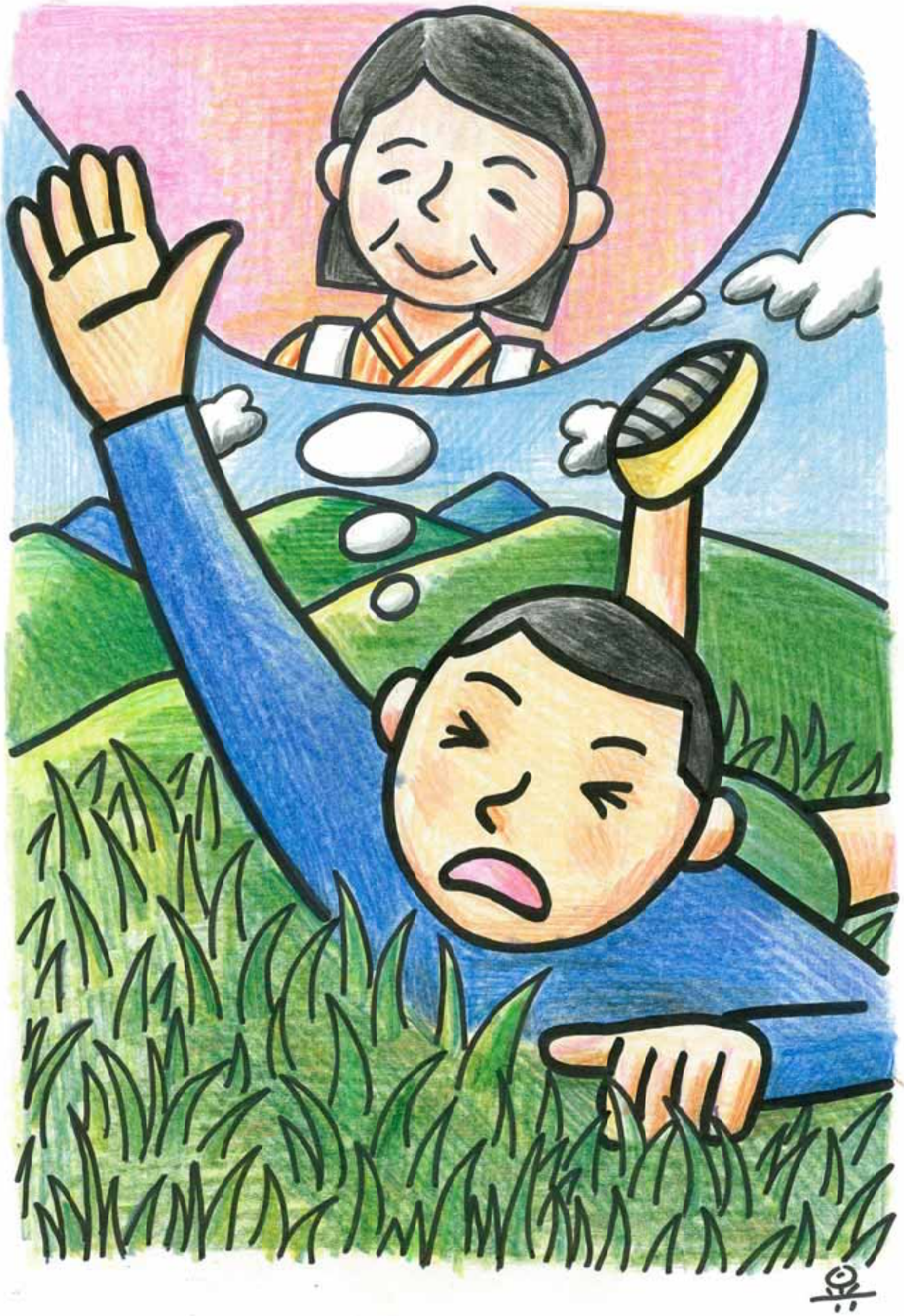
うしろは、わざと、ふりむかなかった。

あたりには、だれひとり、いなかった。

たちどまって、良二は、しばらく、ぼんやりと、かんがえこんでいたが、やがてくずれるように、草

の上にたおれると、うつぶせになって、やわらかい草のなかへ、顔をふせた。

やわらかい草の葉は、良二の顔をつつみこみ、しみこんだひざしのぬくもりと、青い草のにおいと、土のにおいがした。

良二は、そのなかで、そっとさけんだ。

「おかあさん！」